

洛東ブロックの皆様

今年の京都教区の福音宣教のテーマは、「すべてのいのちを守るため」です。去る2月29日のブロック四旬節黙想会で、私は、このテーマで講話をいたしました。フランシスコ教皇訪日の際の講話から、いくつかの言葉を分かち合いました。

「すべてのいのちは、つながっている。つながっていく。過去、現在、未来とつながっていく。さまざま違いを超えてつながっていく。違いによってつながりが豊かになっていく。こうして、宇宙規模でつながりが広がり、深まっていく。すべてのいのちを守るために、こうしたつながりを守っていこう。」私は、教皇のメッセージをこのように受け止めています。

今、私たちは、新型コロナウイルス感染症の広がりの中で、いのちを守る努力をしています。自分のいのちを守るのみならず、まわりのいのちを守るために、マスクを着用し、入念に消毒をしています。自分の思い通り、望み通りに過ごすことを控えています。そうしなければ、すべてのいのちを守ることはできないと深く悟っています。つながりを守りながら、すべてのいのちを守るために、様々な犠牲をささげなければならないことを実感しています。そして、互いのいのちを思いやることで、いのちのつながりを強めることで、今直面している困難を乗り越ろうとしています。

今年の四旬節主日の福音は、洗礼の恵みを思い起こさせる内容となっています。洗礼の恵み、それは、いのちのつながりです。いのちの神とのつながり、いのちである神とのつながり、神に生かされ、愛されているすべてのいのちのつながり合い。こうしたいのちのつながりを体験させる恵みが、洗礼であると言えます。

1日、第一主日の福音(マタイ4・1-11)は、イエスが荒野で悪魔の誘惑を受ける物語でした。悪魔の誘惑、それは、地球環境、隣人、そして、神さえも自分の思い通りになる、思い通りに利用することができる、思い通りにすることで幸福になることができるという思いです。私たちは、時として、利用価値があるという理由だけで何かと、誰かとつながっていないでしょうか。こうしたつながりは、まったくの偽りであり、いのちのつながりを深く傷つけるものであるとして、イエスは徹底して拒絶されます。

8日、第二主日の福音(マタイ17・1-9)は、十字架の道を歩み始められたイエスが、イエスのいのちが輝く場面を伝えていました。このいのちの輝きに、モーセとエリヤが加わります。いのちの道である律法を表すモーセ、いのちの回復を伝える預言者を表すエリヤ、いのちの完成であるイエスが、真のいのちを分かち合います。そして、私たちも、このいのちの分かち合い、いのちのつ

ながりに加わるよう励まされます。様々な苦しみ、悲しみ、痛みを抱えている私たちが共に歩む時、十字架の道を共に歩むイエス、私たちは真の、いのちのつながりを生きることになります。

15日、第三主日の福音(ヨハネ4・5—42)は、「水」について、洗礼の水について教えていました。水がなければ、私たちは生きていけません。水は、いのちの支えです。そして、水は、私たちを清めます。水は、いのちを新たにします。水は、いのちのほこりを洗い流し、再び生きていく力を与えます。洗礼を受けた私たちの中で、この水、いのちの水がわき出ています。私たちは、ウィルス感染防止のために手を洗います。丁寧に時間をかけて洗います。私たちは手を洗う時、心も洗いたいと思います。生かされている喜びを、生かし合う喜びを傷つけるウィルスを、いのちのつながりを汚すウィルスを、洗礼の水によって洗い流したいと思います。

22日、第四主日の福音(ヨハネ9・1—41)は、「見える」ことの意味を考えさせます。私たちには、ウィルスが見えません。今、見えないことの不安や恐れを実感しています。そして、見えないからこそ注意深くなり、慎重になります。いのちも、いのちのつながりも、肉眼では見えません。だから、私たちは、いのちに対して注意深くならなければならないと思います。いのちのつながりを傷つけないように慎重にならなければならないと思います。そして、私たちは、洗礼によって、いのちを、いのちのつながりを見る力を与えられています。見えないいのちを、見えないいのちのつながりを、キリストがら与えられた愛を生きることで見えるようにする力をいただいています。この福音の登場する生まれつき目の見えない人は、自分が癒されることで、神の愛を見えるようにしたのです。自分が見えるようになっただけでなく、まわりを見えるようにしたのです。困難な状況にある今こそ、私たちは、神の愛を見えるようにしたいと思います。

29日、第五主日の福音(ヨハネ11・1—45)は、ラザロの復活の物語です。「ラザロ、出て来なさい。」墓の中いるラザロへのイエスの、この呼びかけは、洗礼の時、私たちが受けた呼びかけでした。そして、私たちは今も、呼びかけられています。「墓から出て来なさい」と。墓とは、いのちのつながりが失われた状態であるといえます。教皇フランシスコが、「物質的には豊かでありながらも、孤独に支配されて生きている」と表現している状態であるといえます。今、私たちは、外出を控えたり、他の人と交わることを避けがちになっています。マスクによって、お互いの顔が見えなくなっています。感染防止のためには、いたしかたないことです。しかし、それは身体的な側面のことであって、いのちのつながりを断つことを意味するものではありません。私たちには、様々な連絡方法があります。そして何よりも、私たちは、互いのことを思い出して、祈り合うことができます。私たちが、祈り合う時、そこに復活のキリストがおられます。互いに思いやり、心配し合い、祈る時、私たちは、墓の中にいません。孤独という墓に留まらず、祈りによる愛のつながりの中で、この困難な状況を生きていきたいと思います。

すべてのいのちを、自分のいのちだけでなく、まわりの人のいのちも、新型コロナウイルス感染症から守る努力を続けていきたいと思います。すべてのいのちが守られるよう、心から、精一杯祈りたいと思います。そして、「出て来なさい」というイエスの招きに応じて、私たちの祈りの家で、主の復活の喜びを祝えるよう、一日も早い終息を願いたいと思います。皆様のために、お祈りしています。

2020年3月16日

洛東ブロック・モデラートル
一場 修